

いよいよ新年、2018年が始まった。「おめでとう」というが、今更めでたくも・・・。新年が開けてめでたいというのは、よくも生きてこられた、死なずにすんだ、嬉しいことだ、ということだろうと思うが、世の中に事故や事件でもない限り、オレは死なない、とまあ、ひねくれた考え方だねえ。

朝起きると昨日描き散らした絵が横たわって並んでいる。灯りを点けて、乾いているかなと調べつつ、立てかけてみる。「よし これでよし」と思えるものは少ない、「あちゃ ちゃ こんな描きなおしだ」というものがほとんどだ。「そんじゃ めし」とパンをトースターで焼く。仕様もない話なんだが、「パンは塩分が多いんだって 血圧が高いよ 塩分をひかえよう」と言われて、好きなパンをひかえるのも嫌だなあと思いつつ、量を減らしている。

いまさら「洋画家だ 油絵画家だ」というのも恥ずかしいというのか、改めて思い起こすと、「照れるねえ そんなもの だったのかねえ」と考えてしまうが。ヘンな前置き、なにをいいたいのかということ、「年号の表し方 西暦で言ってしまう自分を 表現したかっただけ なんですか」と照れ笑いである。たぶん日本画家の人たちは昭和と平成とかを使われるような気がするが、オレはいつも西暦でなんでも表してしまう。

今年の新年の何日間かは天気がいい、昼間には太陽が照っている、穏やかな暖かさが続いている、アトリエの温度計も、一番寒い時間は寝ているので知らないが、朝晩の寒い時間で、7度8度以下には下がらない。

このブログ氏も数えてみると7年目のフォルダになっている、よくもまあ、続いたものだと感心する。十歳代の頃から三日坊主の典型のように、それこそ3ページの時もあつたのではないのかねえ。コンピューターのおかげ、ITのおかげかも知れないが、とおかげが続くがもう一つ、おかげでなんとかブログを書くのが忙しい。年間100本近い原稿、若いころの金もうけの忙しさを思い出す。原稿はほとんどが読書感想文、次いで山の紀行文、自身の人生や考え方、絵の良し悪し、ボヤキや雑記、と言った順番かな。

今日は久しぶりに中央市場付近から摂津に向かって走っている。この二三年はずっとここを走っていたのだが、橋の工事が始まって通行止め、遊歩道を完全通行止めにして、ダンプが、重機が忙しく動き回っている。この通行止めは永らくかかるでしょうね。上ーカミの方は、阪急・JRのガードがあり、人も多いのに比べ、下ーシモの方は人が少ない。正月は太公望のおっさん連も休業のようだ。しばらく中央市場が休みのせいか、カラスめがいないねえと思って走っていたら、流れが変わるあたりに20羽ほどがはしゃいでいる。久しぶりの下流方面の河川敷、スコップで土を上手く整え、溜まった水を流す水路が作ってある。「おお あのおじさんの 仕事だなあ」と続いているスコップの跡を見つつ感謝。以前声をかけると、「いやあ 暖まって いいと」と淡々。帰るときに土手の上へ上がって中央市場を見やると、ごみ置き場に果物が積んである。「あれはミカンとメロンかな あんな大量のメロンかな ダンプ一台分 ぐらい ありそうだが・・・」

縄文時代の本の中に、「最近 顔の研究が さかん」という話が載っている、縄文人と弥生人の頭蓋骨から、顔を復元してその違いがわかる。縄文人はホリが深いのに比べ、弥生人は目が細く、鼻が低く、髭・眉毛が薄いそうだ。

オレの、「わたしはわたし」と書かれた題名の絵は、顔の絵、上下左右に抽象化しているが顔の絵である。顔の話ならオレにもいくつかの材料があるぞと手を挙げたが、さほど中身の濃い話は出てこない、「キミは キミの 絵を描きなさい」ということかねえ。

ちょっとだけ言わせて。オレにもたくさん知人がいる、その人たちの顔は覚えている、それぞれの人の表情も覚えている、時と場合によって違う表情を覚えている。表情の違いが、何故にどうして、どこでどうなって、というような難しい話は研究者におまかせするとしましょう。オレの身近な知人の表情の変化によって、オレもその方に対する感情が左右する、表情が複雑に変化して、お互いの表情が複雑に変化する、この複雑な変化、千変万化とはよく言ったものだが、人の能力はくるくる変わる人の表情を理解できる、これはすごいねえ。

ところで鏡を見ると、「オレもオジンだ」という感想が年々増している。去年の顔写真より今年の方がよりオジン度が進化している、このオジン度の進化は、「いやだねえ」と思いつつ、「おめでとう」

内海延吉著<海鳥のなげき>漁師のこと、魚のこと、知っているようで知らなかった。現代の漁船は鉄の船、プラスチックの船、大きなエンジンでフルスピードを出して海の上を飛んでいく。この本の時代は明治時代だ。

早稲田実業の制服を着た私が転地療養のため叔父に連れられ三崎（神奈川県三浦半島、向かいが城ヶ島）に来たのは明治42年（1909年）二十歳の時だった。城ヶ島の新磯にポツンと仲間に残された一羽の夏の鶉のように、見る影もない哀れな寂しい姿の私だった。やがて一時の腰掛のつもりで奉職した小学校の代用教員だったが、四十年間も田舎教師に安住してしまった。思えば苦難の多い生活、幾度か経過した病気、東京生活をあきらめ、何から何まで無駄な努力を積み重ねてきたような過去の生活、ご自分のふがいなさ情けなさを綴られている。幾多の民俗書を読み、今病院のベッドでこの稿を書き始めた。遠く去った明治の世にたまらない郷愁を寄せながら、三崎の古老、漁業関係者から聞いた話をまとめ上げた。私が漁業生活を知った明治40年代はまだ民俗学が生まれる前、私が書こうとするものは漁師の生の生活である。先生は教員生活のかたわら、漁師生活もしていたようだ。

◎山かげの 夜の三崎の町よりも 暗きところに なげく海かな 与謝野晶子

◎明治の夜の海は暗かった。漁火はまだ石油の箱ランプのころである。船も小さかった。漁師は船の上にいるというよりも、波の中に一人一人が置かれているようだった。明治43年初めて夜の沖に出た漁師歴2年目の私、秋サバ釣りの印象であった。楽々と手元まで手繰り寄せたサバを追っかけてきたカジキが、その長い剣のような鼻先をニョッキリと船端に突き出して、それにキャーッと悲鳴を上げてのけぞった男もあった。船について離れない大きなサメに火ドコの灰を撒いて、箱ランプの灯を吹き消し、その場を逃げたこともあった。モノに脅え恐れている夜の海の漁師であった。こうした暗い夜の海の話は、海坊主だの、流れ仏だの、沖言葉だの、年寄りから聞かされた。

◎古老の諺：かもめはわが子に、決して海鳥にはなるでないぞ、山に卵を産むけれど、孵ればやはり海で暮らす。漁師は板子一枚下は地獄の稼業、薄氷を踏む思いの一生、それでも転業のつても資力のない漁師の嘆きだ。

◎どうしよう-鶉の事：鶉（背は黒く腹は白い）になろうか鷗になろうか、「どうしよう」と考えていたから。鷗は遠くの魚群を教えてくれるが、鶉は漁師と同じようにただ魚を捕るだけ、好かれてはいなかった。

◎シャチ：シャチは世界の漁師の畏敬的である。昔からシャチは海の王様だから捕ってはならぬ、家が絶えると言われてきた。シャチの呼吸音を聞くと、魚たちも、漁師たちも、恐ろしさに縮みあがった。マグロ漁では大打撃をこうむる、延縄にかかったマグロを丸ごと食べてしまう、シロナガスクジラでも葬られてしまう。

◎クジラ：クジラはイワシを連れてきてくれる。千葉県勝山はクジラの漁場だった。何本かの銚で深手、太いシュロ網の重みに抵抗する力も尽きたクジラは、鮮血の漂う海中でがっくり頭を下げ、断末魔をあげる。「一匹のクジラに七浦にぎわう」と言われているが、三崎では、流れクジラを拾った祟り、一匹のクジラに七浦枯れる、と言われていた。

◎サメ：シャチに次いで恐れられていた。シャチは捕ってはならぬ神聖なものに比べ、サメは勝負を挑まねばならない。「サメを銚で突く時は 舟を並べてから突け」舟より大きなサメは捕ることができない。サメを突いてヤナ（銚縄）を取られてしまったり、荒れ狂う凶暴な力に船を転覆させられたり、鋭い歯に触れ死傷者を出した例は少なくない。夜のサバ釣りで、「海に手を入れ 手を洗っては いけない」サメにパクリ手首を噛み切られるからだ。

◎カジキとマグロ：漁の合間や往復の時にカジキを見つけ突くことがあった。大きいのを一本捕ればその日の漁の何倍もの値が付いた。千葉勝浦の話では、漁場で船頭がじっと海を見つめ、全身を耳にしてではなく、全身を鼻にして、メカジキの糞の臭いをかぎ取ろうとしていたようだ。昔からマグロには多くの漁師がマグロに賭けた、一獲千金の夢を捨てきれずに、マグロ漁をしてきた。

◎カツオとブリ：関西ではブリを貴び、カツオは下等な魚と聞かすが、関東ではカツオを貴んだ。カツオは釣る魚で、銚で突いてはならないと言われている。明治のころ、魚の針（鉤）は、針金を曲げヤスリで削ったものだった。三浦半島あたりと、房州では形が違った。

◎「漁師はな 魚に 武士の心を 持たなきゃ いけねえ」暴れる魚を叩き殺してやらなければ、である。

◎林道を歩きはじめて十分ぐらい経った、かすかに雪がついているだけ、空は曇ってはいるが明るい。なんだか今日は穏やかで温かい、「登山には いい日よりだよ」と思わせる天気になってきた。大阪にいて、アトリエでのごそそしている時にはYAHOOの普通の天気予報を利用している。「ええと今日は雨が何時ごろから降るのかな雨が降る前に安威川に行ってしまう」とか「今週は、いつ頃降るのかな雨の日に要事をすませてしまおう」「この長雨はいつまで続くのかうとうしいねえ山に行けないじゃない」YAHOOの天気予報は、同じ市内でも町内ごとに検索できる、茨木市に暮らしていて、南の方と北の方では天候ががらりと違うことがある、こういう細かいところまでわかるのははなはだ便利だ。ところが登山ということになると違ってくる、「YAHOO」ではなくて、「高原と山」というサイトを利用している。今回の場合、明日は山という一日前、普通の天気予報では、奈良県御杖村は晴れマークだったが、「高原と山」では、御杖村から登る三峰山は、「登山に適さない 風が強い」と出ている。よほど変更して、「京都愛宕山にしますよ」と連絡しようとしたが思いとどまった。この思いとどまりがたまたま功を奏した。

◎同道は5人、駐車場のある御杖村青少年旅行村に着き、登山靴にスパッツ、冬用手袋、ザックにはアイゼン、防寒具を入れ、ピッケルを持って歩き始めた。まったくの無風、寒さも感じない、昨夜寝る時には風の音が鳴っていたのが嘘のようだ。空は白く曇っているが雨の心配はなさそう、この暖かさなら降れば雪ではなく雨になるがその心配もなさそうである。駐車場までの道中も、歩いている林道も、うっすら雪は積もっているが、12月に来たときよりも雪は少ない。

◎みなさん雪山不慣れな70歳、整備された登山道、危険な個所のない登りをゆっくりかせいでいく。「暑いので、服を脱ぐ」「ちょっと水」「燃費の悪い岡村さん このパン食って」今日は滝から避難小屋コース、八丁平に登れたらいい、天候が悪い、風がきつい、雪が多いなら途中で引き返そうと思っていた。時間とともに陽が出てきた、2時間ぐらいで避難小屋に着いた。「え もう 避難小屋 すばらしい ここまで来られるとは 屋時なので めしにしましょう」自身の弁当に、おにぎりを、肉の佃煮を、ミカンをいただき満腹である。前回もこの小屋でめしを食ったが、コンロに火をつけてもふきっさらしの小屋は寒かった。今日は歩き出すころには身体が冷えて寒かったが、前回よりはよほど暖かい。小屋の外にでかいブナがある、千手観音のように幹を何本も上へ、右へ左へ、伸ばしている、「また会えた」この木はいいねえ、まだ精霊が宿るには百年早い元気澆刺だ。

◎お気に入りの八丁平にやってきた。芝と苔のまろやかな大地、それこそふきっさらしの中に、強風で大きくなれない木が数本立っている。葉が落ち幹と枝だけの木、この寒空に黒っぽい緑の葉に覆われた緑の塊、地面は枯草色に雪の白色とまだら、緑の苔、雲の多いぼんやりした青空、時々陽も射す、いい空間、温かい、てっぺん満喫である。

◎帰りはこっちから降りましょうかと、別のコースを歩き出した。ひとりがすってん、根を踏んだか氷を踏んだか、「だいじょうぶ おしりを 打っただけ」ひとりが、「ちょっと 怖い 滑りそう」「それでは ザイル」と持参のザイルで身体を結びどンドン下る。「今日は マッターホルンは 見えなかったね」マッターホルンとは隣の高見山のことである。「今日は めっちゃ 快調」「靴が 傷に当たる」嬉々とした声ははずむ。下の方に、御杖森林組合の小屋がある、中に入ると暑いぐらい、「ここは 避難小屋に 貸してもらえるねえ トイレもあるよ」それからしばらく下ると駐車場に着いた。今日は吹雪と積雪で上まで登れないかと思っていたが、軽々の山行でした。ただ残念なことに、このあたりの名物、霧氷にはめぐり会えなかった、木の幹に突き刺さった雪の、氷の形に会えなかった、次回だねえ。

◎大阪からこの辺りにやってくるには、2時間半ぐらいの時間がかかる、時間がかかるが奈良の山々は冬の季節、晴れの日が多い。関西の、日本海側に近い山々は曇っているか雪の日が多い。今回はどこの登ろうかなと思案し、天気を調べ、奈良方面になった。茨木まで帰り、恒例の反省会はもちろん行った。

友人から「忙しい？」とFACEBOOKからメッセージがきた。オレは四半世紀、パソコンのEmailを使ってきた。最初の頃はほとんどの人がEmailのことを知らなかった、なので限られた人たちと、メールアドレスを持っているグループの人たちとだけ話をしていた。まだ電話回線の時代だったので、やり取りに、100円/1分、というような数字の料金がかかった。今や使えばなしで、5000円/1月、という時代になった。Email、これはなかなか便利で速い、しかも料金は基本料金だけであとは要らない、という優れものだ。青少年時代に各戸に電話機が普及した、自宅の電話とはこんなに便利なものと驚いていた。熟年時代にはパソコンが現れ、それまでは電話、もしくは郵便物でやり取りをしていた通信手段が変わっていった。とはいえ、オレのことだけれど展示会の案内状配達はまだまだ郵便物だ。昔は外国の友人たちとは1週間以上も時間のかかる郵便物でやり取りをしていたが、Emailだと瞬時に通信できる、費用もかからない。Email、は長い文章も平気で送れる、添付書類にすると、大量の原稿、帳簿、図面、静止画、動画、なんでも送れる、何人にも送れる、「これは便利だ」と思っていたのだが・・・というのは異変を感じている、原因はスマホの出現、「もうパソコンなんていらぬ」「家庭に在った固定電話もいらぬ」「FAXなにそれ」生活スタイルが変わり、各自がスマホで、通話に、送信に、検索に、ゲームに・・・という昨今に異変を感じている。

携帯電話を持たないオレは、現在、浦島太郎状態になっているのではと怪しんでいる。スマホとは携帯電話のひとつの種類らしい、携帯電話の進化したもの、携帯電話だが機能がすごい。元々は通話、メール、写真機能だけだったが、パソコンの機能が徐々に付属しだした、パソコン化しだした。オレが常時持っているICレコーダー、万歩計、「そんなものもういらぬよ スマホの中に機能が全部ついてるよ」娘に笑われている、これらは要らないそうだ。地図が見られる、パソコン並みに色々な情報が見られる、本も映画も見られる、至れり尽くせりである。ただスマホに関して不満なのは、持っていなくても意見ぐらいいいでしょう、画面が小さい、はがきの半分ぐらいではどうも小さいねえ。はがきの3倍ぐらいの大きさのものもあるらしい、それで写真を写している方、通話している方を見かける、あの大きさなら許せるねえ。いずれにしろ今どきの若い連中は、一日中スマホにくびったけ、何をみているのか画面に見入っている。若者から徐々に60歳代70歳代のジジババ連までスマホに移行しだした、「難しい」「使いこなせるようになった」とまわりでジジババのつぶやきを聞く。すべての人がスマホを使用しだすと、今までパソコンでなんとか事足りていたオレが困りだした。世の中がスマホ仕様、スマホでないとは入っていけない世界がどんどん増えてきているように感じる。携帯を持たない人種としては、抗いようがないのかねえ。

えらく脱線したが、言いたかったのは、FACEBOOKの話。「ソーシャル ネット ワーク」というらしいが何のことやらチンプンカンプンである。オレも、とにかくやっている、立ち上げている、仲間もたくさんいる。見ていると、日常のちょっとした話、井戸端会議の簡単版というところか、写真が載っている、それぞれの現場で撮られた写真、おそらくほとんどがスマホで撮ったものらしい。その写真の下に、「おいしい 飯を 食った」食事処で、自宅で料理したものなどが並ぶ。「今 旅を している」これは色々な風景写真、乗り物の中、旅の途中のものだろう写真と簡単紀行文を現地からUPしている。「欲しかった 物を見つけた」この服が欲しかった、こんな本が欲しかった、愛車の写真です、という具合、きれいに撮られた写真とそれらの単純な説明の言葉が数行載っている。

「FACEBOOKを使って話をしましょう」と言われてもどこまでが公開でどこからが二人だけの会話なのかと悩んでいる、扱い方がもうひとつわからない。「なぜ 普通のメールで 話さないの なぜ FACEBOOK なのか」どうも最近の皆さんの動向がつかみきれない。

パソコンを使い始めて四半世紀は経ったかな、最初の頃は、「VERSION UP バージョンアップ」という言葉が、意味がわからなかった。せつかく使い始めた、テクニック、道具としてのツール、これらが、「より便利に より早く たくさんの仕事 が こなせるようになりました」と言ってくれるが、せつかく慣れたところなのに、「え 今のパソコンでは 使えないの なんて」というようなたくさんの試練を乗り越えてきたが、まだまだ苦難は続く。

ぼおっとしていたが、ふと考えた、「次の展覧会まで 二か月に なっているのでは」3月19日から始まるので、作品の搬入は17日頃になる、「おお ほんとうに 二カ月だ」と多少ボケ気味の頭にスイッチが入った。

まずしなければいけないのは水彩画を描くこと、毎回小さい水彩画をギャラリーの棚の上に並べる、値は2000円、画用紙に描いた水彩画を透明袋に入れただけだけれど、「高い絵は 買わないが これなら 協力したげるよ」と友人知人たちが動かしてくれる。水彩画は、具象の絵、音楽演奏の絵がほとんどで、それに自転車とザックを背負った山姿があるかねえ。いつも50枚ぐらいいは持って行っているかな、絵の具代の足しになるかな、とはいえはありがたい。水彩紙はアルシュよりストラスマアが、今はお気に入り、アルシュは硬くてはじくのに比べ、ストラスマアは適度に吸ってくれる、絵の具のノリがオレにあっているのかな。B2サイズのパネルに水張りをして描いている。水張りのことで気付いたが、水張りが下手になっている、若いころは毎日のように張っていたのに。

絵はたくさんあるだろうと思っている、というのは、今年は毎日のようにその日の日付でサインを入れてきた、できあがって日付とサインを絵の中に入れる。3号6号10号が次々出来上がっている。「いいものがありますか」そういわれると困る、全部を出して見てみないと、「わわわ 全滅だあ」なんてことはないだろうと願っている。春以来、額作りを習って、本当なら今ごろたくさんできているはずなんだが、材木が積まれているといういたらくなんだ。

いつも言うが、「絵とは たかだか 新聞紙ぐらいの大きさの白い画面に 面積をわけ 色を入れたもの」「絵とは 面積 色の 組み合わせ 良いか 悪いかなのか いい絵なのか よくないのか ただそれだけ」「それじゃ 暮のようなもの 陣地の 取りあい せめぎあい なのか」これはちょっと違うように思うが、それでもいいじゃないか、とやかく言っても始まらない、絵に興味を持ってくれたら、絵とはと教えてくれたら、それもいいじゃないかと思う。山に登ると高山植物があり、夏の短い間だけ、黄や、赤や、ピンクや、紫や、と小さい花があちこちに咲く。「お花畑だ きれいだねえ」と澤山さんのセリフ。北海道の富良野に行けば、凸凹がくねった大地に黄や、赤や、ピンクや、紫や、花の帯が敷きつめられている、これは観光ポスターもなっている。花屋の店に入ると、冷氣の中にそれこそ満開の百花繚乱。あれが一番、いやこっちの方がすごい、言いあったところで人の気持ちはあっちにフラフラこっちにフラフラ、人の気持ちはいつも浮気性である。人の気持ちは浮気性であるがゆえに、時として、とんでもないものを発見して、「これはすごい」「いいものを見た 聴いた 触れた」という騒ぎにもなる。

70歳を超え、最近の毎日が面白い、アトリエに籠り、絵を描く、文章を書く、アトリエで寝る、時間になったら腹が減るので飯、さあ走りに行こうと着替えて安威川に行く、そんな毎日が続く。昔は筆が進まない日が多かった、「どうすればいい」と考える日が続いた。これはよくない、「筆さえ動かせば 絵が動く 気持ちが騒ぐ 次が見える」気持ちが楽になり描けるようになった。長い時間絵の前に陣取って、塗って、描いている人を見ると、「たまには 絵を立てかけて 見ないと 考えないと」と偉そうな助言をするが、オレの場合は真逆である。

この5,6年描いている絵、二枚連ねて細長いキャンバスの絵、あの絵はいつもスイスイうまく進む。スイスイうまく流れるのは気持ちがいいし、あっさり仕上がってしかもいい絵だ、「同じものを こればかり 描いても よくないかな」とか「もっと ほかのやつも 挑戦 しなければ」と考えるのがこれはよくないのか、ほかのものを描くべきなのかわからない。なので、スイスイ行かないヤツも描いている。スイスイの方は、構図はほぼ頭の中で決まっている、「今回は 赤でいくかな」「この絵は 青で 描こう」という違いはあるが、最初の一筆から次の色が頭の中に浮かび、次から次に、線が絵に乗っていく、色が画面を埋めていく、「よし できあがり」と簡単に出来上がる。「こんなに簡単に 出来上がって いいものなのかな」なんて杞憂、躊躇は要らない。杞憂<杞憂・中国の杞の人が天地が崩れたらどうしようと憂いた故事から> このシリーズの絵はもう10枚以上はあるだろう、2017年5月の伊予市の展覧会でいくつか並べて見た、なかなか満足であった。

Leslie A Zebrowitz レズリー・セブロウィッツ著<Reading Faces 顔を読む>

◎レンブラントとゴッホの肖像画が載っている。「性格の違いは分かる レンブラントの方が 近づきやすく柔軟に見える」○オレ：レンブラントを調べたが、性格までは載っていない、それに反しゴッホは独善的で横柄だと聞いたことがある。ここに二人を載せ、性格判断をしているのは、疑問の残る選択だねえ。

◎シェークスピア（マクベス）：顔から心のしくみを見抜くのに、コツは要らない。

◎顔の特性は。遺伝的なつながり、進化的に準備された学習、各文化に特有の学習を通じて、様々な属性をあらわす。性別、人種、アイデンティティーといった変化しない個人的属性、感情という急速に変化する属性、さらに年齢、身体的、精神的適応というもっとゆっくり変化する属性。我々が、男性女性、友人他人、怒っている悲しんでいる、健康と不健康、大人か子どもか、区別できなければならない。

◎あかんぼうは、知らないあかんぼうどうしても、いつも微笑むが、大人には拒否反応を示す。

◎人が他の人の顔を見て示す推定年齢は、非常に正確だそうだ。また、他人の顔の固定能力の正確さは、同一人種が一番らしい。○これはわかる。あの人はいくつぐらいだ、あの人は会ったことがある、これらは日常のことだ。相手が日本人ならなおさら、同じ黄色人種もある程度わかるが、白人黒人になるとわかりづらいかも。

◎顔の造り、男女の固定観念を理解するうえで、重要なのは女性の顔の造りが多くの点で、子どもの顔の造りに似ている。○オレは今、男の顔に興味を持って描いている、阿修羅や鬼の顔に興味がある。鼻息荒く鼻の穴をふくらませ、大口を開けて笑っているやら怒っているやらが面白い。

◎人は、たくさんの人が写った写真の中で、自分の顔をすぐに特定する、50年前の写真でも同じことだ。

◎感性を読む。幸せ、恐れ、驚き、怒り、悲しみ、嫌悪、侮蔑、この七つの基本的な感情が顔に現れる。人の感情を読む、人の顔に感情があらわれる。

◎人相学の機能主義者の知覚説によると、我々が顔を読むことに励むのは、人の顔が実際にその人の性格の正確な指標だからである。要望から優位性や外向性を正しく判断できるという証拠はかなり多い。しかし顔の特性だけで十分正しく判断できるという証拠はほんのわずかしかない。○人相学や読顔法、精神の分析、こういう学問があるのだね。

◎容貌から、誠実か、セックスパートナーにできるかどうか、快く同意してくれるかどうか、正直かどうか・・・。

◎顔の五大特性。外交的か、真面目か、愛想がいいか、感情的に安定しているか、教養があるか。

◎容貌から、嘘を見抜く、性格を見抜く。

◎童顔過般化効果：あかんぼうに近い顔をした大人は、暖かさ、弱さ、無邪気さ、率直さという印象を人に与える。○童顔の人、少年期、青年期、中年期、老年期さまざま損得があるらしい。童顔は純真で善悪の区別がつきにくく、込み入った指示を与えにくいのに反し、大人顔の子には多くの期待がかけられる。兵役における童顔兵士は、地位昇格には不利だが、実戦で英雄的行動をとると、おとな顔の兵士より、勲章をもらう数が増えるそうだ。

今日は「局が岳」という山に登ってきた。なぜに「台高」という標題になっているのかというと、最初の計画では、「迷岳に行こう」という話だった。冬のこの季節日本海に近いところは毎日のように天候が思わしくない、ずっと曇っているか、雪が降っていることが多い。そのてん、奈良、和歌山、三重方面は晴れている確率が高いので、自然と足は南に向かう。とはいえまたまた寒波の襲来、なんと数年ぶりの大型寒波だという。先日までの暖かい日々から一転、アトリエにいても手袋が欲しいという状態、室内の温度計も早朝には1度だった。前日の天気予報では、雨は遅くまで降るが、翌日には雨が上がり午前中はまだ曇っているが、午後は晴れるだろう。ただ寒波が来ているので、冷え込み、風もきついという予報だった。

いつものように西名阪柏原 IC で降り、宇陀方面→東吉野方面→166号線で三重県に入る。<166号線奈良県では伊勢街道という名前で載っているが、トンネルを出て三重県に入ると和歌山街道となっている。伊勢街道という名称は、かつて、伊勢にお参りに行く街道のことで、いくつかあったらしい、みだりに使うとわからなくなりそうである。近代的な地図に書かれているが・・・?である。>宇陀あたりでは薄曇り、「南の方は明るい 雪があちこちで積もっている 斜面も上も雪で白い」 県境のトンネル手前、もしやたっぷり雪がついていないかと警戒したが、たいしたこともなく車は走れた。166号線をしばらく走って右折、蓮ダムに向かった。「なんだか雲ゆきが怪しい」と空を見やっているうちに雨が降り出した。寒波到来の薄暗い空の中、車の中は暖かいが外はヒヤリ冷たい空気が、湿って重い空気が流れているのだろう。「やだねえ 降らない という予報じゃ なかったの」とぼやきながらダムサイトを回って登山口へ進むと、前方で車が止まっている。「ここから先は 凍っていけないよ」「だめかなあ」「だめだねえ 四駆でも」やむなく坂道をバックしてリターン、「それでは山を変えよう 局が岳 にしよう」と166号線を南へ進んだ。飯高：道の駅で雨のやむのを待って小休止。大きな道の駅だ、温泉もある、農産物もあるが日本全国野菜は秋の気候のせいで何でもかんでも高くてものが悪い。ピカピカ新鮮ネギと里芋を買った。小降りになったので登山口へ。「やんだかねえ」登山の用意をして登り始めたが、またまた降り出した。

局が岳は1026Mの低い山だが頂上は多少尖っている。麓から見た姿が、十二単を纏った平安時代女性に似ているとかで命名されたらしい。登山道は3本あるらしいが、今回、往路は学校横から遊歩道プラス新道、復路は旧道で局神社に下り、駐車場まで村の中を通って帰った。村の中は茶畑が多くあったが、山の樹々に溶け込んで夕方の光の中にほんのりピンクがかかった白色の花をつけた木がある。「あれはなにかな あちこちの梅は 蕾をふくらませかけているが・・・」「え 今の季節に 桜・・・」冬に咲く桜、「小葉桜」だそうだ。

車を止めたところに野球ができるぐらいの広場がある、草が、土があちこちからこっちまで掘り返されている、「イノシシの仕業か 土木作業のようだねえ」と歩き出したが、雨が降り出しヤッケが濡れる、ザックカバーをかける、「やんでほしい せめて雪ならいいのに・・・」このあたり、飯高北奥林道で山々が連なっているようだ。

一二時間歩いた、雨が降ったりやんだり、ちょっと陽も射す、足元の雪は濡れて10センチぐらい、道がふたつある、「巻道じゃないか なあ」「いやあ ピークを行こう」「えんやこら おととと」小さいピークを苦勞して超えると道は合流していた。すぐに合流する二股は、どこにでもあるんだが・・・。

登るにつれて雪山になってきた、とはいえ足がもぐるほどではない、ぐんぐん登る、あと400Mという標識、ものすごい風の音、上であの風に吹かれたらいやだねえと思いつつぐんぐん登る。汗が出るがヤッケをはだけると寒い、熱いやら寒いやらをがまん、なんだか上の方に空が見えてきた、斜面も急になってきた、頂上に着いた。上はさほどの轟音はしないが、うすら白く曇った空、雪が降る、360度展望がいいはずだけれど、山が、街が霞んでいる。横に大きな反射板、普段の季節なら市民のハイキングの山なんだろうね。今は真っ白、枯れ木に「局が岳 1026M」と書かれた板、雪に埋もれてベンチと、斜めの板つきれ、なんだろうと帰って調べると、「市岐島姫」が祀られている祠だそうだ。

水野弥穂子（やおこ）著<正法眼蔵を読む人のために>

先生が書いておられる。正法眼蔵は難しい、というのが定評のようですが、日本人である道元禅師が、日本人のために、日本語で説かれたものです。当時仏教の教えはたいてい漢文で書かれるのが普通でしたが、正法眼蔵は当時の話ことばに近い和語を、ひらがなで書かれている。道元禅師は中国の、如浄禅師のもと、正伝の仏法の正嫡（しょうでんの・しょうちやく：正統な後継ぎ）となって帰国した。

明治以降西洋哲学を学んだ人たちが、正法眼蔵の哲学的、思想的な部分をさかんにとりあげた。正法眼蔵は宗教書です。「弘法救生（ぐほうくしょう）をおもひとせり」仏法をひろめ、衆生、人々を救う。

◎諸仏如来、ともに妙法をに単伝して、阿耨（あのか）菩提を証するに、最上無為の妙術あり。

☆諸仏とは、仏道修業をして仏になっている人、つまり、君のことじゃ。妙術とは座禅のことじゃ。

◎諸仏かならず威儀を行足す、これ行仏なり。

☆仏道修業している人は、威儀を備えている。諸仏は行仏なり。

このように話が進んでいくが、「むむむ？」である。

◎夢・覚元より如一なり、実相なり。

☆夢と覚（覚めている時）とは本来ひとつである。先生の話：私どもは、厳密に言って、常に私だけの知覚に行き、私だけの記憶を蓄えて生きているわけです。<略>自分が確かに見た、経験したということも、その瞬間は事実であっても次の瞬間からは記憶の中の事実となったものを、自分は見たとか経験したとか思っているにすぎないのです。夢の中で見たり、経験したりすることは、現実の刺激がないのに、自己の記憶を組み合わせで事実だと思っているという点で、自己の本当のありかた<これを実相と言います>からいって、<如一>同じだというわけです。

◎又、夢に国王となって、宮殿・眷属、及び上妙の五欲を捨て、道場に行き、菩提樹下に在って獅子の座に処し、道を求むること七日にいたりて諸仏の知恵を得、無上道を成じおわり、たつて法輪を転じ、四衆（比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷）のために法を説いて千万億劫を経、無漏の妙法を説いて、無量の衆生を度し、後に当に涅槃に入ること、煙の尽き、燈火の滅するが如くなり。

☆国王となって上妙の五欲を捨て、菩提樹の下に成道し、転法を論し、千万億の間衆生を済度してから、涅槃するという長い夢。

夢の話ならわかるかな、面白いかなと思ったが、先生の話では、法華経に突き当たり、仏教に突き当たり、涅槃に突き当たった。ここからはオレの独り言になるのかな。

夢と現実の話、夢と現実が本来ひとつであるとは思わない、夢は夢、現実が現実、同じような価値で同じように存在する。とはいえ、考えるに、「夢」そのものはオレにとってすぐに忘れてしまう、もちろん、「現実」も時間が経てば忘れてしまう。ここでいう夢そのものが、睡眠中に見る夢ではなく、「絵空事」というならまたまた面白い。以前にも聞いた話、道元禅師のことばだとか、「上に輝くのも月、水溜まりに映っているのも月 どちらも月である」というのもおなじような話だけれど、この場合、虚と実という意味で二つしかない設定、この方がすごい。オレが昔から言うことに、「リンゴが在る 見るから在るのではなく 見えなくてもリンゴは在る 無くなるまで在る 無くならない」「だから光が無かったらリンゴの絵が描けない ではなくて 在るものを描くのだ」なんてことを言っていた。絵の「光が当たって リンゴに影と陰ができる それをつかまえるのが デッサンの基本だよ」なんて浅はかな世迷いごとをおぬかしあるな、真っ暗闇でも真空空間でも、在るものは在る、その在るリンゴを描かなければいけない。というのがオレの持論である。夢の世界、鏡の世界とは違うねえ、オレがあっちにもこっちにも居る、目の前の見えるものも、見えないものも、在る。「在るなら 絵に 描け いい絵を描け」オレをしかる鬼の言葉なり